



No.35
2009.2

LIBRA

財団法人 東海ジェンダー研究所 THE TOKAI FOUNDATION FOR GENDER STUDIES
〒460-0022 名古屋市中区金山1-9-19 (ミズノビル5F)
TEL 052-324-6591 FAX 052-324-6592 E-mail info@libra.or.jp

女性の貧困に見えるものに、 ゆっくり生きて関係を豊かに

働く女性の全国センター (ACW2) 共同代表 伊藤 みどり



年末の派遣村で、雇用破壊の現状は見えるものとなり厚生労働省や与党の中にも大きな問題提起をした。これまでの労働団体の枠を超えての多くの市民団体、超党派で作られた「反貧困ネットワーク」の運動の成果だと思う。

しかし、女性の貧困が見えない現状は変わらない。そんな現状を変えようと私たちは、昨年9月に「貧乏でも安心！女一人でもでも安心！」「女性と貧困ネットワーク」の立ち上げ集会を120名以上の女性たちの熱気に満ちて開催した。この日、初めて会った女性たちが、次々と、貧乏体験を語りだした。皆が「安心してしゃべることができる場」を強く求めていることを感じた。

女たちは、ずっと貧乏だった。現在では、女性の54%が非正規雇用で男性の40%の賃金で働かされている。2007年度の厚生労働省が出した年齢別、雇用形態別の雇用者推移で女性は、25歳をピークにして右肩下がりに正社員が減少している。年収比較でも、年収200万円以下の女性は約40%に対して、男性は、10%に満たない。「女は、結婚して子どもを産み、夫に養ってもらうのが当たり前」という前提の上での女性の賃金の低さは変わっていない。

パートや派遣では、生活できないから複合労働も黙ってせざるを得ない状況だ。結婚しても、いろんなことを女は我慢してきた。夫のDVや、男が女を養ってあげていると言う力関係のためだ。シングルマザーは、さらに深刻だ。養育費を支払わない男が多すぎる。女一人、子どもを抱えていたら住まいを借りることさえ大変だ。女性のホームレスは、性暴力を恐れて見えないところに、ひっそりと暮らしている。女は、いつも見えない存在にされている。私たちは、女性の貧困を可視化して、女性と貧困ネットワークを広げたいと考えている。

今年1月、ACW2の第38回総会では、「女性の貧困に見えるものに、ゆっくり生きて関係を豊かに」と言うテーマで、フリーター、派遣、パート、正社員、路上生活と、まったく異なる立場で、話し合った。その中で、会場発言も含めて多様な意見が活発に出された。高度成長期に就職した世代、就職氷河期世代、単純に世代だけでは語れないが、「働くことが怖い、できれば会社で働くことを少なくしたい」と言う若い世代と、「働くことは、貧困からの脱出、ギリギリ働いてきた」中高年世代との働くことへの意識のギャップも鮮明になった。

しかし、まず女たちでこの現実を、まず理解しあうことが必要だと思った。どちらが正しいかと言う議論の仕方ではなく、お互いの現状を理解しあい、女性の貧困を可視化し解消するために何が必要なのか、労働が怖いものではなく、最低限の文化的で、人間らしい生活を維持することが持続可能な労働のあり方を、私たちは、夢を持って語りたいと思う。

20代、30代が、働くことを怖いと感じる、世の中に未来はないと考える。

「世界の中の日本のフェミニズム」 を聞いて

去る12月14日、東海ジェンダー研究所主催の国際講演会が催された。講演者のヴェラ・マッキーさんは、メルボルン大学歴史学部教授で、日本のフェミニズム研究などにも造詣が深い。水田珠枝先生からマッキーさんがお茶の水大時代に1920, 30年代の日本のフェミニズムの研究をされていたと聞いていたので、丁度その時代の女性思想、女性運動に関心をもつ私は期待して出席した。

講演の主旨は、明治初期以来日本の女性たちが培ってきた日本のフェミニズムの歴史を、トランスナショナルな文脈の中に位置づけてみることであった。そもそも女性運動はその始まりから他の国々の女性たちとの繋がりの中で行われてきたことが指摘された。1970年代の日本のフェミニズム運動に多く焦点を当てながら、そこからまた以前のフェミニズムに遡って考察が加えられた。

世界的経済危機に直面している現在、マッキーさんは現在の危機的状況を打開するためにフェミニズム運動は新しい国際的協力と繋がりをつくる時期だと訴えられた。

講演後、コメンテーターの金子幸子さんから日本のフェミニズムが世界へ発信できるものは何か、第3世界のフェミニズムとどうつながるか、など3点のコメントが出され、討議となった。



金子さんとマッキーさん



名古屋都市センターに於いて



懇親会

マッキーさんはとても日本語が堪能で、日本語のレジメが配布されたうえに通訳なしでの講演や質疑応答であったため、頭脳と耳をそれほど緊張させる必要もなくつろいで講演を聴けて助かったというのが偽らざる感想であった。

(中京大学教授 志村 明子)

名古屋大学国際シンポジウムより ∞∞∞

昨年12月19-21日の3日間、東海ジェンダー研究所の後援ならびに名古屋大学学術振興基金の助成を得て、名古屋大学野依記念学術交流館にて国際シンポジウム「ジェンダーの事象と表象—観られる身体、読まれる欲望、多様化する家族」を開催した。

カリフォルニア大学バークレー校リンダ・ウィリアムズ教授、メルボルン大学ヴェラ・マッキー教授、イェール大学ローズマリー・モーガン教授の基調講演や、主催した名古屋大学国際言語文化研究科の教員による研究報告、学生のポスター発表に加え、イダキという珍しい楽器演奏とアート・パフォーマンスとのコラボレーション、映画「スターフィッシュ・ホテル」の監督を招いての上映&トーク、国内外で知られるアーティスト高木正勝氏の作品上演&トークもあり、多彩な内容となった。

英語（通訳なし）による報告が半分近くに及んだが、3日間で延べ500人以上の方に足をお運び頂いた。ご来場の皆様やゲストの方々、そして貴研究所に、この場を借りて厚く御礼申し上げたい。

(名古屋大学准教授 新井 美佐子)

It's Obama!

アメリカに住んで五十年近くなるが、今度の大統領選挙ほど世界中が真剣になったのを見たことがない。大半のアメリカ人はブッシュ政権がアメリカの国際的評価の失墜を齎したことを気にしていたし、六年も続いた戦争で経済が底を着き、社会機構が疲弊し、若者達が真剣に自分達の将来がこの選挙に掛かっていると理解して投票して勝ち取った選挙だった（詳しくは三月に出版される自著『年寄りはまだまっくれ?!』を参照）。

半分黒人の大統領を選んだことは、アメリカ合衆国始まって以来の画期的な忘れ得ないことだった。南ア連邦がマンデラを選んだときの興奮を思い出す。勿論これで人種問題は治まったとはいえないが・・・。

二年前、女性のヒラリーが候補に出たということで私は大いに期待していた。前著（『ええ加減にしなければ! アメリカはん!』）に女性が指導者になれば子供がいるいないに拘わらず動物に備わっている女の保護本能を発揮して平和を保つ政策をし、戦争が絶えるだろうと書いた。彼女が大統領夫人だったとき、知的に見え好感を持っていたからだ。

この選挙運動で彼女はイラク戦争に賛成の投票をしていたのが明らかになった。選挙運動の最中に宣伝のため多くの将軍を集めて会議をしたのがテレビに流された。将軍達をこのように差配できると見せたかったらしい。「コソボに視察に行ったときは弾丸が雨霰と降ってくる中を飛行機から降りて」と自分は戦争を知っているという明らかな嘘をついた。大統領夫人が視察となるとメディアが付いて行くので皆どういう状態だったかを覚えているという判断や、またイラク戦争をするブッシュ政権の理由が嘘で固められていたのを見抜けなかった。

オバマが、彼女が大統領になっても素早い判断ができないと言ったのは説得力があった。オバマの強みは戦争に賛成しなかったことと常に冷静に論理的に討論したことだった。

一方彼女のオバマ叩きはざる賢さを見せ、二十年も前に彼がアフリカに行った時に着たアフリカの装束の写真を見せてムスリムである（彼はそうでない）、全部のムスリムが悪者であるように言った。こういう事が今度はマッケインの選挙運動に取り入れられた。今までクリントン夫婦に好感を持っていた私を含めた多くのフェミニスト、インテリ女性に嫌悪感を持たせてしまった。ヒラリーを最後まで推していたのは単純に「女でも大統領になれるのを娘に見せたい」という人や黒人はどうもというレイシストが多かった。

大統領になる資質は、性とか人種とかに関係なく、理性的で正直で公正で、多文化の理解度が今の世界に必要なだとアメリカ人は判断した。過半数が過去八年のキリスト教原理主義の女性の権利無視、非科学的な政治で、嘘ばかりついて中産階級から税金として資産をとりあげたことに対する怒りで投票したのだ。ヒラリーもマッケインもペイリンも本質を見抜かれてしまった。何回も討論をテレビでしていると本質が見えてくる。

オバマに多くのインテリ女性が投票したのは、夫人のミッシェルがとても聡明で庶民の苦しみ分かり自分達の味方で、オバマが間違ふとそれをいち早く指摘できる女性であると判断したからだと思う。選挙運動の時に分かったのと、早速大統領夫人になってから、男女平等の賃金制度に取り組んでいる。

（作家 米谷 ふみ子）

賛助会員受付中

2009年度の賛助会員を募集中です。皆様のご意見を賜わりながら事業を進めてまいりたいと存じます。ご意見、ご要望がございましたらいつでもご連絡をお待ちしております。

賛助会費：年間千円 郵便振替口座：00820-0-77338

産後休暇は5日で適切か？ —フランス法務相の場合—

ラシーダ・ダーティさんは43歳、サルコジ政権の法務相である。昨年末に帝王切開で第一子を出産し、5日後の1月2日には髪をセットし、ハイヒールをはき、ひだスカートに豹柄のジャケットという小ぎれいな服装で出勤した。赤ん坊の父親が誰かは「複雑な個人的事情」のために明らかにしない。

これに関連してイギリスの新聞『インディペンデント』（1月9日）は、産後の休暇は何日が適切かという記事を掲載した。イギリスでは最低2週間の休暇が法的に規定されており、アメリカ合衆国やユネスコの専門家も、母体の回復と新生児のために5、6週間の休暇は必要という。他方で、母体の回復には個人差があり、どれだけ休暇をとるかは仕事と家庭のバランスで判断し、個人の選択の問題だという意見もある。

しかし、現状では個人が自由意志で選択しているわけではない。ダーティさんの場合は、母親はアルジェリア人、父親はモロッコのレンガ工、12人兄弟のひとりでイスラム教徒、フランスで最初の北アフリカ出身の閣僚にまで上ったという経歴をもつ。サルコジ政権の右派を代表する彼女の政策には同僚の反対が強く、職場での圧力はきびしい。

産後の休暇をきりつめるのは彼女だけではない。それは働く女性に共通の現象で、近年では物価上昇のために、早期に職場復帰をする母親の率は増加している。産後休暇の期間は個人の選択かもしれないが、社会が母親をサポートしなければならないと、この記事は締めくくっている。

（当研究所理事 水田 珠枝）

事業の充実を図るため、昨年より、事務所と同じビル内に一室を借り、セミナー室を設けています。利用するには、ご登録が必要となります。今年度は、当研究所主催の講座、個人助成報告会を始め、関係者並びに賛助会員の方々の研究会等にご利用いただいています。

セミナー室を利用して

私達、ケア問題研究会は介護問題について様々な面から検討している研究会です。

会合は、平成19年より東海ジェンダー研究所内で中田照子先生を座長として1、2ヶ月に1回のペースで開催され、毎回活発な議論が行われています。特に、新しくセミナー室が設けられてからは、ますます盛んに討議が重ねられるようになりました。

私達が現在取り組んでいる課題は、ジェンダー問題と同じく、社会的に適切な認識が受けられないことにより生じている介護労働についてです。議論の際には、制度面、ジェンダー問題としての側面など、様々な面から熱く論議されています。

私は、このようにお互いの知見を深めていくためには、自由な意見を出しあえる環境が欠かせないと感じています。その意味で、セミナー室は私達の研究会にとって欠かせないものとなっています。

今後も、このセミナー室を拠点にお互いの知見を高めていきたいと考えています。

（東海福祉総合専門学校教員 前田 啓貴）



『不自然な母親と呼ばれたフェミニスト—シャーロット・パーキンズ・ギルマンと新しい母性』

東信堂 3200円

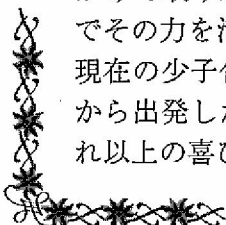
貴研究所から1998年度第2回研究助成費をいただきほぼ十年がたちます。『ジェンダー研究』(第2号)に載せていただいた拙論「ギルマン夫人と二つの母性保護論争—母性と女性の経済的自立をめぐる—」も含め、昨年の2008年6月ようやく1冊の単著として出版することができました。改めて研究助成費を拝受できましたことを深く感謝いたします。

今回自評させていただく私の本は、東京外国語大学大学院から2002年に学位を与えられた博士論文を書き直したものです。学位論文のタイトルは『シャーロット・パーキンズ・ギルマンと「社会的母性」』でしたが、本書では『不自然な母親と呼ばれたフェミニスト—シャーロット・パーキンズ・ギルマンと新しい母性』に改めました。知人のなかには「おもしろいタイトルですね、出版社がつけてくれたのですか?」とたずねる方もいます。タイトルとしては少し風変わりかもしれませんが、私自身で考えました。

私は42歳までジェンダー研究やアカデミックな世界とはまったく縁のない専業主婦として生きてきました。埼玉大学で社会人学生を募集しているという小さな新聞記事が私の興味をひき、3度目の挑戦でようやく許された学生生活の中でギルマンという百年前の一人のフェミニストの思想家と出会いました。タイトルで表現したように少々変わり者の思想家だったギルマンは、日本では当時から今も彼女の名前を知る人はほとんどいませんが、ギルマン自身の生涯とそのフェミニズム思想の魅力に私が引き込まれて20年近くになります。

ギルマンが投げかけた問いは現在に至るまで必ずしも解決されているわけではありませんが、この書において思想家ギルマンの格闘の痕跡は少なくとも描けたと思っています。ギルマンが生涯をかけて取り組んだテーマとは、性役割分業を前提とする近代社会において女性が男性と同様に社会でその力を活かすことは可能か、そのために社会はどう変化すべきか、ということになると思います。現在の少子化対策やワーク・ライフ・バランスの概念につながる興味深いテーマです。個人的関心から出発したささやかな私の研究でしたが、この拙書を多くの方々が手にとっていただけるならこれ以上の喜びはありません。

(津田塾大学教員 山内 恵)



平成20年度 寄贈・購入図書

題 名	編著者	出版社
性と生殖の近世	沢山美果子	勁草書房
江戸の捨て子たち	沢山美果子	吉川弘文館
リブニュース この道ひとすじ	リブ新宿センター資料保存会	インパクト出版会
男同士の絆	イヴ・K・セジウィック	名古屋大学出版会
リブ新宿センター資料集成・パンフレット篇	リブ新宿センター資料保存会	インパクト出版会
リブ新宿センター資料集成・ピラ篇	リブ新宿センター資料保存会	インパクト出版会
近代日本女性論の系譜	金子幸子	不二出版
近代ヨーロッパの探究 ①ジェンダー	姫岡とし子他	ミネルヴァ書房
不自然な母親とよばれたフェミニスト	山内恵	東信堂
変革期に生きる女たち	竹中恵美子	ウイメンズブックストアゆう
ジェンダー法・政策研究叢書 第1巻～第12巻	辻村みよ子他	東北大学出版会
ジェンダー研究のフロンティア 1～5	戒能民江他	作品社
現代社会とメディア・家族・世代	NHK 放送文化研究所	新曜社

他

≡≡≡ プロジェクト団体「福祉国家研究部会」の活動より ≡≡≡

2008年9月14日、15日に、「福祉国家研究部会」は「ジェロントロジー研究会」と共催で、「まちづくりと高齢者の生活施設」を考える施設見学と「介護の社会化を考える」シンポジウムを、福山市内で開催しました。

第1日目は「あけぼのあゆみホーム」を見学しました。施設長さんから施設の概要や食事の工夫などの説明を受け、施設を見学。女性の施設利用者が過去の経験を熱っぽく話してくれたのが印象的でした。第2日目の午前、株式会社「ホープ」を見学しました。この施設は通所のデイサービスに、様々なマシンを取り入れてトレーニングを行っており、責任者の加藤さんから説明を受けました。ここでも話しかけたのは女性の利用者さん。

午後は、「介護の社会化の意義と介護の質を考える」という題でシンポジウムが開かれました。新城大谷大学の三好禎之さんから「瀬戸内海諸島における高齢者の実態」、シニアライフ研究所の岡久美子さんから名古屋市での取り組み例「介護の社会化への道」、グループホームあけぼのあゆみホームの佐々木重綱さんと（株）ホープの加藤勤さんから福山の「施設現場の状況」という報告がありました。最後に「福祉国家研究部会」の中田照子さんが介護の社会化の意義についてまとめられました。

(福山市立女子短期大学教授 加納 三千子)

賛助会員の声

社会を見る目

1949年、新憲法が施行、戦後初の総選挙で39人の女性議員が誕生した。当時、最悪の食糧事情の下で、赤ちゃんがころころ死んでいた。

この問題をとりあげた女性議員たちは、国会内に、超党派で牛乳・乳製品対策委員会を結成し、市民団体とともに対策に乗り出した。その委員会のボランティア書記になったことが私の新しい出発点となった。

糸口をつくったのが社会科学研究会だった。戦後の町には、戦地からの復員者を含めて若い失業者があふれていた。若者たちは重いリュックを背負って食料品の買出しにいき、闇物資で生計をたてた。「食べるために生きるのか、生きるために食べるのか？」若者たちは真剣に悩んだ。そしてそここに生まれたのが社会科学研究会だった。

そこで学んだ社会を見る目はいまでも私の人生を支える力になっている。

(日本福祉大学名誉教授 児島 美都子)

大学院生活と、医療福祉の職場での生活と平行して思うことがあります。それは、生活の場と、研究の場とでは、同じものでも大きく違うこと。現場では、依然に家父長的なものがあって、それが「ついている」ことすら認識できず、当たり前でしようがないとして処理される。研究の場にいると、よく見えて、「なんとかしないと！」と様々な言説分析などしたりするけど、生活の場では「しようがないじゃないか」でやり過ごしてしまう、そんなふうに分けていることに気づく。東海ジェンダー研究所が、男女共同参画という言葉ではなく、「ジェンダー」という言葉をしっかり使って、日常と研究の場を紡ぐ空間であってほしいと思います。中華圏では、ジェンダーを「性別」と表記し、「両性」と分けて言葉を使っています。「性別」には、「両性」を包含する、多様な性と生のありようが込められた意味だといいます。東海ジェンダー研究所の今後の発展に期待しております。

(医療福祉機関勤務 杉山 貴士)

3月1日開催の「賛助会員のつどい」について

定員の倍近いお申込をいただき、心よりお礼申し上げます。ご報告は次回させていただきますが、今後企画などについてご希望がございましたら、是非お聞かせください。

(事務局)